

論文

江南西路の酒麴務

清 木 場 東

〇 江南西路

1 洪州

(1) 酒統計

洪州の旧酒務及び新旧酒銭額は次の如くである。

洪州	〇1
舊。在城及奉新・豊城・分寧・武寧県・進賢・土坊鎮七務	①
歳	②
	③
熙寧十年祖額	47,567貫
	51,704貫003文
買撲	2,382貫264文

①原文，欠。原文「新豊」

②原文，欠。原文「武県」

③原文，士。志，士

旧額47,567貫，新額（官売＋買撲）54,086貫（文は計算せず）で，両額の差額は6,519貫，増額率は14%である。官売額51,704貫（文切捨）が新額に占める官売率は96%，買撲額貫2,382が占める買撲率は4%になる。以上の諸数値を銭額表にまとめる。

〇1 洪州 銭 額 表

旧 額	47,567 貫	
新 額	官売	51,704 貫
	買撲	2,382 貫
	計	54,086 貫
新旧差額	6,519 貫	
増 額 率	14 %	
官 売 率	96 %	
買 撲 率	4 %	

(2) 酒務表

01 洪州 県変遷図

寰宇記106・九域志6・
方域12により太平興國中～元豊間の洪州諸県の変化を県変遷図⁽¹⁾に示す。酒統計は在城・県4・鎮市2を記すが、それらからは旧務年代は不明であるので、一般的な旧務年代である景祐～慶暦に従っておく。

年 代	外 県					郭 下	
太平興國中 976～983	武 寧	奉 新	靖 安	豊 城	分 寧	新 建	南 昌
至道3年 997					查田鎮② 建置	樵舍鎮① 建置	進賢鎮③ 建置
旧務年代	1○	2○	3○	4○	×	×	○
熙寧10年 1077	○5	○4	○3	○2	○	○	○
元豊	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓

図によれば熙寧10年前の旧外県5で、また県酒務4であるので、県置務率 $(4 \div 5)$ は80%になる。州県務（在城+県務4）は5務で、全酒務7務に占める州県務の州県務率 $(5 \div 7)$ は71%になる。鎮市務は2務で、鎮市務率 $(2 \div 7)$ は29%になる。なお靖安県に酒務は置かれなかった。

次に酒統計に○印を付した¹在城・²奉新・³豊城・⁴分寧・⁵武寧県（州県務5）及び⁶進賢・⁷土坊鎮（鎮市務2）の計7処が酒務・旧商税務の併設地である。酒務地7処に占める併設地の併設率 $(7 \div 7)$ は、100%になる。旧商税務8処⁽²⁾に占める併設地の対旧商税務率 $(7 \div 8)$ は、88%になる。

次に酒務地に新商税務が設置された地である新税務地は、酒統計に□印を付した上記の1～5の地、及び6・7の地の計7処である。酒務地7処に対する新税務地の新務地率 $(7 \div 7)$ は、100%になる。新商税務10処⁽³⁾に対する新税務地の対新商税務率 $(7 \div 10)$ は、70%である。

次に酒務地で元豊まで存在して地理表⁽⁴⁾にみえる存続地は、酒統計の地名に△印を付している。存続地は上記の1～5の地、及び6・7の地で計7処である。

01 洪州 格都督 地理表 (主戸180,760 客戸75,474 計256,234 貢 葛)

格	県	距 離	郷	鎮	%	その他	備 考	水 系	計 8
望	南昌	郭下	16	4	25	0	土坊・進賢・新義・閩安鎮	武陽水, 宮亭湖	2
望	新建	郭下	16	6	37	0	大安・新城・樵舍・大通・ 西嶺・松湖鎮	章水	1
望	奉新	西 150	10	0	0	0		華林水	1
望	豐城	南 155	18	4	22	0	港口・河湖・曲江・赤江鎮	豐水	1
望	分寧	西 600	8	1	12	0	查田鎮	脩水, 瀑布水	2
緊	武寧	北 360	8	0	0	0		東津水	1
中	靖安	西北 160	5	0	0	0			0
計	7		81	15	18	0	土 産 蠟, 柑橘, 葛布, 絲布, 梅煎		5 種

外 県	置 務 県	置 務 率	州 県 務	州 県 務 率	鎮 市 務	鎮 市 務 率	酒 務	併 設 地	併 設 率	旧 商 税 務	対 旧 商 税 務 率	新 税 務 地	新 務 地 率	新 商 税 務	対 新 商 税 務 率	存 続 地	存 続 率
5	4	80	5	71	2	29	7	7	100	8	88	7	100	10	70	7	100
併 設 地		州 県	¹ 在城・ ² 奉新・ ³ 豊城・ ⁴ 分寧・ ⁵ 武寧県													5 処	
計 7		鎮 市	⁶ 進賢・ ⁷ 土坊鎮													2 処	
新税務地		州 県	1～5の地													5 処	
計 7		鎮 市	6・7の地													2 処	
存 続 地		州 県	1～5の地													5 処	
計 7		鎮 市	6・7の地													2 処	
不 明 地		0 処											不 明 率	0 %			

注

- (1) 県変遷図の作成史料は拙著『北宋の商業活動』（久留米大学経済叢書13, 2005年），423頁参照。
- (2) (1)の書422頁に掲載。郭下の南昌・新建は税務数に含めず。
- (3) (1)の書422頁に掲載。
- (4) (1)の書424頁の地理表を移録。

2 虔州

(1) 酒統計

虔州の旧酒務及び新旧酒銭額は次の如くである。

虔州 O2

舊。在城及義豐監・安遠・雩都・虔化・信豐・龍南・端金・興國・石城・贛県・寶積・銀場十三務

①原文，贛県。志，贛県
郭下県，酒務数に入れず

歳	24,560貫
熙寧十年祖額	26,394貫 523文
買撲	739貫 992文

旧額24,560貫，新額（官売＋買撲）27,133貫（文は計算せず）で，両額の差額は2,573貫，増額率は10％である。官売額26,394貫（文切捨）が新額に占める官売率は97％，買撲額739貫が占める買撲率は3％になる。以上の諸数値を銭額表にまとめる。

O2 虔州 銭 額 表

旧 額	24,560 貫	
新 額	官売	26,394 貫
	買撲	739 貫
	計	27,133 貫
新旧差額	2,573 貫	
増 額 率	10 %	
官 売 率	97 %	
買 撲 率	3 %	

(2) 酒務表

宋本寰宇記108・九域志 6 により太平興國中～元豊間の虔州諸県の変化を県変

O2 虔州 県変遷図

年 代	外 県											郭下	
太平興國中	曾	上	大	南	龍	石	瑞	信	虔	安	雩	興	贛 県
	昌	猶	庚	康	南	城	金	豐	化	遠	都	國	
	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓		
	①	①	①										
	南安軍												
淳化1年 990													
旧務年代	1×				2×	3×	4×	5×	6×	7×	8○	9○	○
熙寧10年 1077	○9				○8	○7	○6	○5	○4	○3	○2	○1	○
	↓				↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓

遷図⁽¹⁾に示す。酒統計は在城・県8（郭下の贛県を除く）・鎮市3を記すが、それらからは旧務年代は不明であるので、一般的な旧務年代である景祐～慶暦に従っておく。

図によれば熙寧10年前の旧外県9で、また県酒務8であるので、県置務率（8÷9）は89%になる。州県務（在城+県務8）は9務で、全酒務12務に占める州県務の州県務率（9÷12）は、75%になる。鎮市務は3務で、鎮市務率（3÷12）は、25%になる。なお曾昌県に酒務は置かれなかった。

次に酒統計に○印を付した¹在城・²雩都・³興國（州県務3）が酒務・旧商税務の併設地である。酒務地12処に占める併設地の併設率（3÷12）は、25%になる。旧商税務6処⁽²⁾に占める併設地の対旧商税務率（3÷6）は、50%になる。なお安遠・虔化・信豊・瑞金・石城・龍南の6県に旧商税務は置かれなかった。

次に酒務地に新商税務が設置された地である新税務地は、酒統計に□印を付した上記の⁴1～³3の地・⁴安遠・⁵虔化・⁶信豊・⁷龍南・⁸瑞金・⁹石城（州県務9）である。酒務地12処に対する新税務地の新務地率（9÷12）は、75%になる。新商税務13処⁽³⁾に対する新税務地の対新商税務率（9÷13）は、69%になる。

次に酒務地で元豊まで存在して地理表⁽⁴⁾にみえる存続地は、酒統計の地名に△印を付している。存続地は上記の1～9の地、及び¹⁰寶積・¹¹銀場（鎮市務2）で計11処である。酒務地12処に占める存続地の存続率（11÷12）は、92%になる。なお

旧商税務・新商税務・地理表に見えない不明地は¹²義豊監で、不明地が酒務地12に占める不明率（1÷12）は、8 %になる。以上の虔州の酒務・諸数値を酒務表に整理して示す。

02 虔州 格上 地理表（主戸81,621 客戸16,509 計98,130 貢 白紵）

格 県	距 離	郷 鎮	%	その他	備 考	水 系	計10
望 贛	郭下	6	4	66	楊梅・合流・平固・七里鎮 銀場 1 蛤湖銀場	章水, 貢水	2
望 虔化	東北 535	6	0	0	鉛場 1 寶積鉛場	虔化水	1
望 興國	東 240	6	0	0	0	平江	1
望 信豐	南 195	5	0	0	0	夢水	1
望 雩都	東南 171	6	0	0	銀場 1 名不記 錫場 1 天井錫場	雩水	1
望 會昌	東 400	5	0	0	錫場 1 拔溪錫場	榮陽水	1
望 瑞金	東南 300	4	0	0	銀銅場 1 九龍銀銅場	錦江	1
緊 石城	東 700	2	0	0	0		
上 安遠	東南 700	4	0	0	0	安遠水	1
中 龍南	南 450	6	0	0	0	渥水	1
計 10		50	4	8	土 産 鉛, 竹梳箱, 糖, 蜜梅 (宋本)		4 種

02 虔州 酒 務 表

外 置 置 州 州 鎮 鎮 酒 併 併 旧 対 新 新 新 対 存 存	置 務 務 州 州 鎮 鎮 酒 併 併 旧 対 新 新 新 対 存 存	置 務 務 州 州 鎮 鎮 酒 併 併 旧 対 新 新 新 対 存 存	置 務 務 州 州 鎮 鎮 酒 併 併 旧 対 新 新 新 対 存 存	置 務 務 州 州 鎮 鎮 酒 併 併 旧 対 新 新 新 対 存 存	置 務 務 州 州 鎮 鎮 酒 併 併 旧 対 新 新 新 対 存 存	置 務 務 州 州 鎮 鎮 酒 併 併 旧 対 新 新 新 対 存 存	置 務 務 州 州 鎮 鎮 酒 併 併 旧 対 新 新 新 対 存 存	置 務 務 州 州 鎮 鎮 酒 併 併 旧 対 新 新 新 対 存 存	置 務 務 州 州 鎮 鎮 酒 併 併 旧 対 新 新 新 対 存 存	置 務 務 州 州 鎮 鎮 酒 併 併 旧 対 新 新 新 対 存 存	置 務 務 州 州 鎮 鎮 酒 併 併 旧 対 新 新 新 対 存 存	置 務 務 州 州 鎮 鎮 酒 併 併 旧 対 新 新 新 対 存 存	置 務 務 州 州 鎮 鎮 酒 併 併 旧 対 新 新 新 対 存 存	置 務 務 州 州 鎮 鎮 酒 併 併 旧 対 新 新 新 対 存 存	置 務 務 州 州 鎮 鎮 酒 併 併 旧 対 新 新 新 対 存 存	置 務 務 州 州 鎮 鎮 酒 併 併 旧 対 新 新 新 対 存 存	置 務 務 州 州 鎮 鎮 酒 併 併 旧 対 新 新 新 対 存 存
9	8	89	9	75	3	25	12	3	25	6	50	9	75	13	69	11	92
併 設 地	州 県	¹ 在城・ ² 雩都・ ³ 興國															3 処
計 3	鎮 市																0 処
新 税 務 地	州 県	1～3の地・ ⁴ 安遠・ ⁵ 虔化・ ⁶ 信豐・ ⁷ 龍南・ ⁸ 瑞金・ ⁹ 石城															9 処
計 9	鎮 市																0 処
存 続 地	州 県	1～9の地															9 処
計 11	鎮 市	¹⁰ 寶積・ ¹¹ 銀場															2 処
不 明 地		¹² 義豊監															1 処
		不明率															8 %

注 1 郭下県は酒務数に入れず 2 義豊監は地理表にみえず。区分, 鎮市務

注

- (1) 県変遷図の作成史料は前掲拙著425頁参照。
- (2) (1)の書425頁に掲載。
- (3) (1)の書425頁に掲載。
- (4) (1)の書427頁の地理表を移録。

3 吉州

(1) 酒統計

吉州の旧酒務及び新旧酒銭額は次の如くである。

吉州 O3

舊。在城及廬陵・太和・安福・永新・龍泉・吉水・沙市・
①報恩鎮九務

①原文，廬。志，廬
 郭下県，酒務数に入れず

歳	5,303貫
熙寧十年祖額	18,215貫314文
買撲	1,778貫760文

旧額5,303貫，新額（官売＋買撲）19,993貫（文は計算せず）で，両額の差額は14,690貫，増額率は277%である。官売額18,215貫（文切捨）が新額に占める官売率は91%，買撲額1,778貫が占める買撲率は9%になる。以上の諸数値を銭額表にまとめる。

(2) 酒務表

宋本寰宇記109・九域志6・地理志4により太平興國中～元豊間の吉州諸県の変化を県変遷図⁽¹⁾に示す。酒統計は在城・県5（郭下の廬陵県を除く）・鎮市2を記すが，それらからは旧務年代は不明であるので，一般的な旧務年代である景祐

O3 吉州 銭 額 表

旧 額	5,303 貫	
新 額	官売	18,215 貫
	買撲	1,778 貫
	計	19,993 貫
新旧差額	14,690 貫	
増 額 率	277 %	
官 売 率	91 %	
買 撲 率	9 %	

～慶暦に従っておく。

図によれば至和元年前の旧外県5で、また県酒務5であるので、県置務率（5÷5）は100%になる。州県務（在城+県務5）は6務で、全酒務8務に占める州県務の州県務率（6÷8）は、75%になる。鎮市務は2務で、鎮市務率（2÷8）は、25%になる。

03 吉州 県変遷図

年 代	外 県							郭下
太平興國中	永 新	太 和	萬 安	龍 泉	安 福	新 淦	（永） （吉） 豐 水	廬 陵
雍熙1年 984							折地置県④	
淳化3年 992					臨江軍①			
旧務年代	1×	2×		3×	4○		報恩鎮改名昇格②	
至和1年 1054			萬安鎮昇格③					
熙寧4年 1071								
10年	○7	○6	○5	○4	○3		○2 ○1	○

次に酒統計に○印を付し

た在城・²安福・³吉水県（州県務3）が酒務・旧商税務の併設地である。酒務地8処に占める併設地の併設率（3÷8）は、38%になる。旧商税務6処⁽²⁾に占める併設地の対旧商税務率（3÷6）は、50%になる。なお永新・太和・龍泉の3県に旧商税務は置かれなかった。

次に酒務地に新商税務が設置された地である新税務地は、酒統計に□印を付した上記の1～3の地・⁴太和・⁵永新・⁶龍泉（州県務6）及び⁷沙市（鎮市1）の計7処である。酒務地8処に対する新税務地の新務地率（7÷8）は、88%になる。新商税務12処⁽³⁾に対する新税務地の対新商税務率（7÷12）は、58%になる。

次に酒務地で元豊まで存在して地理表⁽⁴⁾にみえる存続地は、酒統計の地名に△印を付している。存続地は上記の1～6の地、及び7の地で計7処である。酒務地8処に占める存続地の存続率（7÷8）は、88%になる。なお旧商税務・新商税務・地理表に見えない不明地は⁸報恩鎮務で、不明地が酒務地8処に占める不明率（1÷8）は、12%になる。以上の吉州の酒務・諸数値を酒務表に整理して示す。

O3 吉州 格上 地理表（主戸130,767 客戸142,630 計273,397 貢 葛、紵布）

格	県	距 離	郷	鎮	%	その他	備 考	水 系	計 7
望	廬陵	郭下	9	1	11	0	永和鎮	頼水	1
望	吉水	東北 40	6	0	0	0		吉水	1
望	安福	西 140	13	1	7	0	時磐鎮	大泉	1
望	太和	南 80	6	0	0	0		遂興水	1
望	龍泉	西南 210	5	0	0	0		龍泉江	1
望	永新	西南 220	13	2	15	0	沙市・栗傳鎮	勝業水	1
望	永豐	東 140	5	2	40	0	沙溪・彰化鎮	報恩江	1
望	萬安	南 180	3	0	0	0			0
計 8			60	6	10	0	土産 碁子、竹紙、絲布、白紵布、茶、藤（宋本）		6種

O3 吉州

酒 務 表

外	置	置	州	州	鎮	鎮	酒	併	併	旧	対	新	新	新	対	存	存
県	務	務	県	県	市	市	務	設	設	商	税	税	務	商	税	続	続
5	5	100	6	75	2	25	8	3	38	6	50	7	88	12	58	7	88
併 設 地		州 県	¹ 在城・ ² 安福・ ³ 吉水 県														3 処
計 3		鎮 市															0 処
新税務地		州 県	1～3の地・ ⁴ 太和・ ⁵ 永新・ ⁶ 龍泉														6 処
計 7		鎮 市	⁷ 沙市														1 処
存 続 地		州 県	1～6の地														6 処
計 7		鎮 市	7の地														1 処
不 明 地		⁸ 報恩鎮										1 処	不 明 率		12 %		

注 郭下県廬陵は旧商税務、酒務数に入れず

注

- (1) 県変遷図の作成史料は前掲拙著、428頁参照。
- (2) (1)の書427頁に掲載。
- (3) (1)の書427頁に掲載。
- (4) (1)の書429頁の地理表を移録。

O4 袁州 県変遷図

年 代	外 県				郭下
太平興國中	萬 戴	新 喻	萍 郷	(分 宜)	宜 春
雍熙 1 年 984				析地置県①	
淳化 3 年 992		② 臨江軍			
旧務年代	1○		2○	3○	○
熙寧10年 1077	○3		○2	○1	○

O4 袁州 鎮変遷図

年 代	石 分	上 栗	慮 溪	宣 風	獲 村
至道 3 年 997	Ⓐ				
旧務年代	×	○	○	○	○
熙寧10年 1077	×	×	×	×	×
元豊	○	○	○	○	○

なる。旧商税務 8 処⁽²⁾ に占める併設地の対旧商税務率 $(4 \div 8)$ は、50%になる。

次に酒務地に新商税務が設置された地である新税務地は、酒統計に□印を付した上記の 1～4 の地の計 4 処である。酒務地 4 処に対する新税務地の新務地率 $(4 \div 4)$ 100%になる。新商税務 4 処⁽³⁾ に対する新税務地の対新商税務率 $(4 \div 4)$ は、100%になる。

次に酒務地で元豊まで存在して地理表⁽⁴⁾ にみえる存続地は、酒統計の地名に△印を付している。存続地は上記の 1～4 の地である。酒務地 4 処に占める存続地の存続率 $(4 \div 4)$ は、100%になる。なお旧商税務・新商税務・地理表に見えない不明地はなく、不明率は 0 %である。以上の袁州の酒務・諸数値を酒務表に整理して示す。

O4 袁州 格上 地理表 (主戸79,207 客戸50,477 計129,684 貢 白紵)

格 県	距 離	郷 鎮	%	その他	備 考	水 系	計 4
望 宜春	郭下	12	0	0		袁江, 宜春水	2
望 分宜	東 80	10	2	20	貴山・石分鎮 鉄務 1 貴山鐵務	昌江	1
望 萍郷	西 145	7	3	42	0 廬溪・宣風・上栗鎮		0
緊 萬載	北 80	5	1	20	0 獲村鎮	康樂水	1
計 4		34	6	17	1 土産	白紵布, 葛, 紙, 竹鞋, 酒 (宋本)	5 種

O4 袁州 酒 務 表

外 県 3	置 務 県 3	置 務 率 100	州 県 務 4	州 県 務 率 100	鎮 市 務 0	鎮 市 務 率 0	酒 務 4	併 設 地 4	併 設 率 100	旧 商 税 務 8	対 旧 商 税 務 率 50	新 税 務 地 4	新 務 地 率 100	新 商 税 務 4	対 新 商 税 務 率 100	存 続 地 4	存 続 率 100
併 設 地		州 県	¹ 在 城 ・ ² 分 宜 ・ ³ 萍 郷 ・ ⁴ 萬 載														4 処
計 4		鎮 市															0 処
新 税 務 地		州 県	1 ～ 4 の 地														4 処
計 4		鎮 市															0 処
存 続 地		州 県	1 ～ 4 の 地														4 処
計 4		鎮 市															0 処
不 明 地			0 処											不 明 率		0 %	

注

- (1) 県変遷図・鎮変遷図の作成史料は前掲拙著, 430頁参照。
- (2) (1)の書430頁に掲載。
- (3) (1)の書430頁に掲載。
- (4) (1)の書431頁の地理表を移録。

5 撫州

(1) 酒統計

撫州の旧酒務及び新旧酒銭額は次の如くである。

撫州 O5	
舊。在城一務	
歳	12,826貫
熙寧十年祖額	19,305貫017文
買撲	1,736貫670文

旧額12,826貫，新額（官売＋買撲）21,041貫（文は計算せず）で，両額の差額は8,215貫，増額率は64%である。官売額19,305貫（文切捨）が新額に占める官売率は92%，買撲額1,736貫が占める買撲率は8%になる。以上の諸数値を銭額表にまとめる。

O5 撫州 銭 額 表

旧 額	12,826 貫	
新 額	官売	19,305 貫
	買撲	1,736 貫
	計	21,041 貫
新旧差額	8,215 貫	
増 額 率	64 %	
官 売 率	92 %	
買 撲 率	8 %	

(2) 酒務表

宋本寰宇記110・九域志6により太平興國中～元豊間の撫州諸県の変化を県変遷図⁽¹⁾に示す。酒統計は在城のみを記すが，在城からは旧務年代は不明であるので，一般的な旧務年代である景祐～慶暦に従っておく。

図によれば熙寧10年前の旧外県3であるが，県酒務0であるので，県置務率は

O5 撫州 県変遷図

年 代	外 県				郭下
太平興國中	(金谿)	宜黄	南豊	崇仁	臨川
			↓ ①		
			建昌軍		
淳化 2 年 991					
5 年	② 建置				
旧務年代	1 ○	2 ×		3 ×	○
熙寧 10 年 1077	○ 3 ↓	○ 2 ↓		○ 1 ↓	○ ↓

0 %である。州県務は在城のみで、州県務率 (1÷1) は、100 %になる。鎮市務はなく、鎮市務率は0 %である。なお金谿・宜黄・崇仁の3県に酒務は置かれなかった。

次に酒統計に○印を付した¹在城が酒務・旧商税務の併設地で、併設率 (1÷1) は、100 %である。旧商税務2処⁽²⁾に占める併設地の対旧商税務率 (1÷2) は、50 %になる。

次に酒務地に新商税務が設置された地である新税務地は、酒統計に□印を付した上記の1の地で、新務地率 (1÷1) は、100 %である。新商税務4処⁽³⁾に対する新税務地の対新商税務率 (1÷4) は、25 %になる。

次に酒務地で元豊まで存在して地理表⁽⁴⁾にみえる存続地は、酒統計の地名に△印を付している上記の1の地である。酒務地1処に占める存続地の存続率 (1÷1) は、100 %になる。なお旧商税務・新商税務・地理表に見えない不明地はなく、不明率は0 %である。以上の撫州の酒務・諸数値を酒務表に整理して示す。

O5 撫州 格上 地理表 (主戸93,915 客戸61,921 計155,836 貢 葛)

格 県	距 離	郷	鎮	%	その他	備 考	水 系	計 4
望 臨川	郭下	17	4	23	0	界山・豊安・長林・清遠鎮	臨川水	1
望 崇仁	西南 109	因	0	0	0		寶唐水	1
望 宜黄	南 150	3	0	0	0		宜黄水	1
緊 金谿	東 120	7	0	0	0		金谿水	1
計 4		27	4	14	0	土 産 箭簞, 柘木, 葛, 茶杉紙 (宋本)		4 種

郷合計は崇仁県の郷0と仮定

O5 撫州

酒 務 表

外 県	置 務 県	置 務 率	州 県 務	州 県 務 率	鎮 市 務	鎮 市 務 率	酒 務	併 設 地	併 設 率	旧 商 稅 務	対 旧 商	稅 務 率	新 稅 務 地	新 稅 地 率	新 商 稅 務	対 新 商	稅 務 率	存 続 地	存 続 率
3	0	0	1	100	0	0	1	1	100	2	50	1	100	4	25	1	100		
併 設 地		州 県	1 在城 1 処																
計 1		鎮 市	0 処																
新 稅 務 地		州 県	1 の地 1 処																
計 1		鎮 市	0 処																
存 続 地		州 県	1 の地 1 処																
計 1		鎮 市	0 処																
不 明 地			0 処											不 明 率		0 %			

注

- (1) 県変遷図の作成史料は前掲拙著，432頁参照。
- (2) (1)の書432頁に掲載。
- (3) (1)の書432頁に掲載。
- (4) (1)の書433頁の地理表を移録。

6 筠州

(1) 酒統計

筠州の旧酒務及び新旧酒錢額は次の如くである。

筠州 O6

○□△ ○□△ ○□△
舊。在城及上高・新昌三務

歳

18,014貫

熙寧十年祖額

12,693貫642文

買撲

692貫460文

旧額18,014貫，新額（官売＋買撲）13,385貫（文は計算せず）で，両額の差額は－4,629貫，増額率は－26％である。官売額12,693貫（文切捨）が新額に占める官売率は95％，買撲額692貫が占める買撲率は5％になる。以上の筠州諸数値を銭額表にまとめる。

N6 筠州 銭 額 表

旧 額	18,014 貫	
新 額	官売	12,693 貫
	買撲	692 貫
	計	13,385 貫
新旧差額	－4,629 貫	
増 額 率	－26 %	
官 売 率	95 %	
買 撲 率	5 %	

旧銀額 46兩

新銀額 46兩 2 錢

(2) 酒務表

宋本寰宇記106・九域志6により太平興國中～元豊間の筠州諸県の変化を県変遷図⁽¹⁾に示す。酒統計は在城・県2を記すが，それらからは旧務年代は不明であるので，一般的な旧務年代である景祐～慶暦に従っておく。

図によれば熙寧10年前の旧外県2で，また県酒務2であるので，県置務率（2÷2）は100％になる。州県務（在城＋県務2）は3務で，全酒務3務に占める州県務の州県務率（3÷3）は100％である。鎮市務はなく，鎮市務率は0％である。

O6 筠州 県変遷図

年 代	外 県	郭下
	青 新 上 江 昌 高	高 安
太平興国3年 978	↓	↓
淳化3年 992	↓ ② 臨江軍	↓
旧務年代	1○ 2○	○
熙寧10年 1077	○ 2 ○ 1 ↓ ↓ ↓	○ ↓

次に酒統計に○印を付した¹在城・²上高・³新昌（州県務3）が酒務・旧商税務の併設地である。酒務地3処に占める併設地の併設率（3÷3）は，100％になる。旧商税務3処⁽²⁾に占める併設地の対旧商税務率（3÷3）は，100％である。

次に酒務地に新商税務が設置された地である新税務地は，酒統計に□印を付した上記の1～3の地である。酒務地3処に対する新税務地の新務地率（3÷3）は，100％になる。新商税務3処⁽³⁾に対する新税務地3の対新商税務率（3÷3）は，

100%である。

次に酒務地で元豊まで存在して地理表⁽⁴⁾にみえる存続地は、酒統計の地名に△印を付している。存続地は上記1～3の地である。酒務地3処に占める存続地の存続率（3÷3）は、100%になる。なお旧商税務・新商税務・地理表に見えない不明地はなく、不明率は0%である。以上の筠州の酒務・諸数値を酒務表に整理して示す。

06 筠州 格上 地理表（主戸36,134 客戸43,457 計79,591 貢 紵）

格	県	距 離	郷	鎮	%	その他	備 考	水 系	計 3
望	高安	郭下	17	0	0	0		鍾口江	1
望	上高	西南 95	14	0	0	0		斜口水	1
望	新昌	西 120	9	0	0	0		大江	1
計 3			40	0	0	0	土 産 南燭子，南燭花，出調露，薯藥， 黎源茶，黃雀兒鮓，牛尾狸（宋本）		7種

06 筠州

酒 務 表

外 県	置 務 県	置 務 率	州 県 務	州 県 務 率	鎮 市 務	鎮 市 務 率	酒 務	併 設 地	併 設 率	旧 商 税 務	対 税 旧 商 率	新 税 務 地	新 務 地 率	新 商 税 務	対 税 新 商 率	存 続 地	存 続 率
2	2	100	3	100	0	0	3	3	100	3	100	3	100	3	100	3	100
併 設 地		州 県	¹ 在城・ ² 上高・ ³ 新昌														3 処
計 3		鎮 市															0 処
新 税 務 地		州 県	1～3の地														3 処
計 3		鎮 市															0 処
存 続 地		州 県	1～3の地														3 処
計 3		鎮 市															0 処
不 明 地													0 処	不 明 率		0 %	

注

- (1) 県変遷図の作成史料は前掲拙著，434頁参照。
- (2) (1)の書433頁に掲載。
- (3) (1)の書434頁に掲載。
- (4) (1)の書435頁の地理表を移録。

7 興國軍

(1) 酒統計

興國軍の旧酒務及び新旧酒銭額は次の如くである。

興國軍 O7

舊。在城及大治県・佛圖鎮三務

歳	35,119貫
熙寧十年祖額	29,624貫507文
買撲（不記）	

旧額35,119貫，新額（官売＋買撲）29,624貫（文は計算せず）で，両額の差額は－5,495貫，増額率は－16％である。官売額29,624貫（文切捨）が新額に占める官売率は100％，買撲額は記されていず，買撲率は0％である。以上の諸数値を銭額表にまとめる。

O7 興國軍 銭 額 表

旧 額	35,119 貫	
新 額	官売	29,624 貫
	買撲	0 貫
	計	29,624 貫
新旧差額	－5,495 貫	
増 額 率	－16 %	
官 売 率	100 %	
買 撲 率	0 %	

(2) 酒務表

宋本寰宇記113・九域志6・地理志4により太平興國中～元豊間の興國軍諸県の変化を県変遷図⁽¹⁾に示す。酒統計は在城・県1・鎮市1を記すが，それらからは旧務年代は不明であるので，一般的な旧務年代である景祐～慶暦に従っておく。

図によれば熙寧10年前の旧外県 2 で、また県酒務 1 であるので、県置務率 $(1 \div 2)$ は 50% である。州県務（在城 + 県務 1）は 2 務で、全酒務 3 務に占める州県務の州県務率 $(2 \div 3)$ は、67% になる。鎮市務は 1 務で、鎮市務率 $(1 \div 3)$ は、33% である。なお通山県に酒務は置かれなかった。

次に酒統計に○印を付した¹在城・²大冶県（州県務 2）が酒務・旧商税務の併設地である。酒務地 3 処に占める併設地の併設率 $(2 \div 3)$ は、67% になる。旧商税務 2 処²に占める併設地の対旧商税務率 $(2 \div 2)$ は、100% になる。

次に酒務地に新商税務が設置された地である新税務地は、酒統計に□印を付した上記の 1・2 の地、及び³佛圖鎮（鎮市務 1）の計 3 処である。酒務地 3 処に対する新税務地の新務地率 $(3 \div 3)$ は、100% になる。新商税務 5 処³に対する新税務地 3 の対新商税務率 $(3 \div 5)$ は、60% である。

次に酒務地で元豊まで存在して地理表⁴にみえる存続地は、酒統計の地名に△印を付している。存続地は上記の 1・2 の地、及び 3 の地で計 3 処である。酒務地 3 処に占める存続地の存続率 $(3 \div 3)$ は、100% になる。なお旧商税務・新商税務・地理表に見えない不明地はなく、不明率は 0 % である。以上の興國軍の酒務・諸数値を酒務表に整理して示す。

07 興國軍 県変遷図

年 代	外 県	郭下	軍 名
	通 大 山 冶	永 興	
	鄂 州		
	羊山鎮 ↓ 昇格改名		
太平興国 2 年 977	③ ④	①	① 永興軍
3 年			↓ ② 興國軍
旧務年代	1 × 2 ○	○	
熙寧10年 1077	○ 2 ○ 1	○	
	↓	↓	↓

07 興國軍 格同下州 地理表 (主戸40,970 客戸21,890 計53,860 貢 紵)

格 県	距 離	郷 鎮	%	その他	備 考	水 系	計 3	
望 永興	郭下	8	9	112	0	富池・佛圖・潁歩・ 硤口・鳳新・龍川・ 寶川・炭歩・三溪鎮	大江	1
緊 大冶	西 88	4	2	50	錢監 1 富民錢監 銅場 1 名不記 鉄務 1 磁湖鐵務	磁湖	1	
中 通山	西 140	1	0	0	0	通羊水	1	
計 3		13	11	84	3	土 産 茶，銅，鐵，銀（宋本）	4 種	

07 興國軍 酒 務 表

外 県 2	置 務 県 1	置 務 率 50	州 県 務 2	州 県 務 率 67	鎮 市 務 1	鎮 市 務 率 33	酒 務 3	併 設 地 2	併 設 率 67	旧 商 税 務 2	対 旧 商 税 率 100	新 税 務 地 3	新 務 地 率 100	新 商 税 務 5	対 新 商 税 率 60	存 続 地 3	存 続 率 100
併 設 地		州 県	¹ 在城・ ² 大冶県														2 処
計 2		鎮 市															0 処
新税務地		州 県	1・2 の地														2 処
計 3		鎮 市	³ 佛圖鎮														1 処
存 続 地		州 県	1・2 の地														2 処
計 3		鎮 市	3 の地														1 処
不 明 地														0 処	不 明 率		0 %

注

- (1) 県変遷図の作成史料は前掲拙著, 435～436頁参照。
- (2) (1)の書435頁に掲載。
- (3) (1)の書435頁に掲載。
- (4) (1)の書437頁の地理表を移録。

8 南安軍

(1) 酒統計

南安軍の旧酒務及び新旧酒銭額は次の如くである。

南安軍	08
舊。在城及南康県二務	
歳	6,522貫
	銀 46兩
熙寧十年祖額	4,106貫137文
買撲	1,746貫419文
	銀 46兩2錢

旧額貫6,522新額（官売+買撲）5,852貫（文は計算せず）で、両額の差額は-670貫、増額率は-10%である。官売額4,106貫（文切捨）が新額に占める官売率は30%，買撲額1,746貫の買撲率は30%になる。以上の諸数値を銭額表にまとめる。

08 南安軍 銭 額 表

旧 額	6,522 貫	
新 額	官売	4,106 貫
	買撲	1,746 貫
	計	5,852 貫
新旧差額	-670 貫	
増 額 率	-10 %	
官 売 率	70 %	
買 撲 率	30 %	

(2) 酒務表

九域志6により淳化元年～元豊間の南安軍諸県の変化を県変遷図⁽¹⁾に示す。酒統計は在城・県1を記すが、それらからは旧務年代は不明であるので、一般的な旧務年代である景祐～慶暦に従っておく。

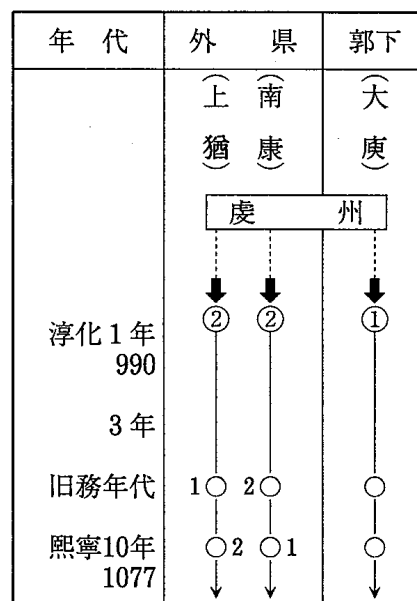
図によれば熙寧10年前の旧外県2で、また県酒務1であるので、県置務率（1÷2）は50%になる。州県務（在城+県務1）は2務で、全酒務2務に占める州県務の州県務率（2÷2）は100%になる。鎮市務はなく、鎮市務率は0%である。なお上猶県に酒務は置かれなかった。

次に酒統計に○印を付した¹在城・²南康県（州
県務 2）が酒務・旧商税務の併設地である。酒
務地 2 処に占める併設地の併設率（2÷2）は、
100%になる。旧商税務 3 処⁽²⁾に占める併設地
の対旧商税務率（2÷3）は、67%になる。

次に酒務地に新商税務が設置された地である
新税務地は、酒統計に□印を付した上記の 1・
2 の地である。酒務地 2 処に対する新税務地の
新務地率（2÷2）は、100%である。新商税務 3
処⁽³⁾に対する新税務地の対新商税務率（2÷3）
は、67%になる。

次に酒務地で元豊まで存在して地理表⁽⁴⁾にみえる存続地は、酒統計の地名に△
印を付している。存続地は上記の 1・2 の地である。酒務地 2 処に占める存続地
の存続率（2÷2）は、100%になる。なお旧商税務・新商税務・地理表に見えな
い不明地はなく、不明率 0 %である。以上の南安軍の数値を酒務表に整理して示
す。

O8 南安軍 県変遷図



O8 南安軍 格同下州 地理表（主戸34,024 客戸1,775 計35,799 貢 紵）

格	県	距 離	郷	鎮	%	その他	備 考	水 系	計 3
中	大庾	郭下	5	1	20		硤頭鎮	良熱水	1
望	南康	東北 160	5	2	40	錫務 1	南壘・章水鎮 瑞陽錫務	章水	1
上	上猶	東北 200	2	0	0	鉄務 1	山田鐵務	猶水	1
計 3			12	3	25	2	土 産 震字記不記（旧は虔州の地）		

08 南安軍

酒 務 表

外 県	置 務 率	置 務 率	州 県 務	州 県 務 率	鎮 市 務	鎮 市 務 率	酒 務	併 設 地	併 設 率	旧 商 税 務	対 旧 商 率	新 税 務 地	新 務 地 率	新 商 税 務	対 新 商 率	存 続 地	存 続 率
2	1	50	2	100	0	0	2	2	100	3	67	2	100	3	67	2	100
併 設 地		州 県	¹ 在城・ ² 南康県														2 処
計 2		鎮 市															0 処
新 税 務 地		州 県	1・2 の地														2 処
計 2		鎮 市															0 処
存 続 地		州 県	1・2 の地														2 処
計 2		鎮 市															2 処
不 明 地														0 処	不 明 率		0 %

注

- (1) 県変遷図の作成史料は前掲拙著438頁参照。
- (2) (1)の書437頁に掲載。
- (3) (1)の書437に掲載。
- (4) (1)の書438頁の地理表を移録。

9 臨江軍

(1) 酒統計

臨江軍の旧酒務及び新旧酒銭額は次の如くである。

臨江軍 09
^①〇□△^{〇□△}
 舊。在城及新淦・新喻県三務
^②
 歳
 熙寧十年祖額
 買撲

12,570貫
 12,245貫
^①
 1,446貫132文

- ①原文，安。誤
臨安軍ナシ
- ②原文，除。新除県ナシ
志，淦
- ①原文，文

旧額12,570貫，新額（官売＋買撲）13,691貫（文は計算せず）で，両額の差額は1,121貫，増額率は9％である。官売額12,245貫（文切捨）が新額に占める官売率は89％，買撲額1,446貫が占める買撲率は11％になる。以上の諸数値を銭額表にまとめる。

〇9 臨江軍 銭 額 表

旧 額	12,570 貫	
新 額	官売	12,245 貫
	買撲	1,446 貫
	計	13,691 貫
新旧差額	1,121 貫	
増 額 率	9 %	
官 売 率	89 %	
買 撲 率	11 %	

(2) 酒務表

九域志6により太平興國中～元豊間の臨江軍諸県の変化を県変遷図⁽¹⁾に示す。酒統計は在城・県2を記すが，それらからは旧務年代は不明であるので，一般的な旧務年代である景祐～慶暦に従っておく。

図によれば熙寧10年前の旧外県2で，また県酒務2であるので，県置務率（2÷2）は100％である。州県務（在城＋県務2）は3務で，全酒務3務に占める州県務の州県務率（3÷3）は，100％になる。鎮市務はなく，鎮市務率は0％である。

次に酒統計に○印を付した¹在城・²新淦・³新喻県（州県務3）が酒務・旧商税務の併設地である。酒務地3処に占める併設地の併設率（3÷3）は，100％になる。旧商税務5処⁽²⁾に占める併設地の対旧商税務率（3÷5）は，60％である。

次に酒務地に新商税務が設置された地である新税務地は，酒統計に□印を付した上記の1～3の地である。酒務地3処に対する新税務地の新務地率（3÷3）は，100％になる。新商税務3処⁽³⁾に対する新税務地の対新商税務率（3÷3）は，100％である。

〇9 臨江軍 県変遷図

年 代	外 県	郭下
太平興國中	新 淦 新 喻 袁州	清 江 筠州
淳化3年 992	②	①建軍
旧務年代	1○	2○
熙寧10年 1077	○2	○1

次に酒務地で元豊まで存在して地理表⁽⁴⁾にみえる存続地は、酒統計の地名に△印を付している。存続地は上記の1～3の地である。酒務地3処に占める存続地の存続率（3÷3）は、100%になる。なお旧商税務・新商税務・地理表に見えない不明地はなく、不明率は0%である。以上の臨江軍の酒務・諸数値を酒務表に整理して示す。

09 臨江軍 格同下州 地理表（主戸68,286 客戸2,111 計70,397 貢 絹）

格	県	距 離	郷	鎮	%	その他	備 考	水 系	計 3
望	清江	郭下	5	2	40	0	清江・永泰鎮	大江	1
望	新淦	東南 60	9	0	0	0		淦水	1
望	新喻	西 120	11	1	9	0	萬安鎮	淦水	1
計 3			25	3	12	0	土 産 寰宇記不記（旧は袁・吉・筠の地）		

09 臨江軍

酒 務 表

外 県	置 務 県	置 務 率	州 県 務	州 県 務 率	鎮 市 務	鎮 市 務 率	酒 務	併 設 地	併 設 率	旧 商 税 務	対 税 旧 商 率	新 税 務 地	新 務 地 率	新 商 税 務	対 税 新 商 率	存 続 地	存 続 率
2	2	100	3	100	0	0	3	3	100	5	60	3	100	3	100	3	100
併 設 地		州 県	¹ 在城・ ² 新淦・ ³ 新喻県														3 処
計 3		鎮 市															0 処
新 税 務 地		州 県	1～3の地														3 処
計 3		鎮 市															0 処
存 続 地		州 県	1～3の地														3 処
計 3		鎮 市															0 処
不 明 地													0 処	不 明 率		0 %	

注

- (1) 県変遷図の作成史料は前掲拙著439頁参照。
- (2) (1)の書438頁に掲載。
- (3) (1)の書439頁に掲載。
- (4) (1)の書440頁の地理表を移録。

10 建昌軍

(1) 酒統計

建昌軍の旧酒務及び新旧酒銭額は次の如くである。

建昌軍 O10	
舊。在城及南豊県・太平場三務	①志，銀場
歳	15,181貫
熙寧十年祖額	13,542貫 988文
買撲	375貫 881文

旧額15,181貫，新額（官売＋買撲）13,917貫（文は計算せず）で，両額の差額は－1,264貫，増額率は－8％である。官売額13,542貫（文切捨）が新額に占める官売率は97％，買撲額375貫が占める買撲率は3％になる。以上の諸数値を銭額表にまとめる。

O10 建昌軍 銭 額 表

旧 額	15,181 貫	
新 額	官売	13,542 貫
	買撲	375 貫
	計	13,917 貫
新旧差額	－1,264 貫	
増 額 率	－8 %	
官 売 率	97 %	
買 撲 率	3 %	

(2) 酒務表

寰宇記110・九域志6により太平興國中～元豊間の諸県の変化を県変遷図に示す。酒統計は在城・県1・鎮市1を記すが，それらからは旧務年代は不明であるので，一般的な旧務年代である景祐～慶暦に従っておく。

図によれば熙寧10年前の旧外県¹で、また県酒務¹であるので、県置務率（ $1 \div 1$ ）は100%である。州県務（在城+県務¹）は2務で、全酒務3務に占める州県務の州県務率（ $2 \div 3$ ）は、67%になる。鎮市務は1務で、鎮市務率（ $1 \div 3$ ）は、33%である。

次に酒統計に○印を付した¹在城・²南豊県（州県務²）の計2処が酒務・旧商税務の併設地である。酒務地3処に占める併設地の併設率（ $2 \div 3$ ）は、67%になる。旧商税務2処⁽²⁾

に占める併設地の対旧商税務率（ $2 \div 2$ ）は、100%である。

次に酒務地に新商税務が設置された地である新税務地は、酒統計に□印を付した上記の1・2の地、及び³太平場（鎮市務¹）の計3処である。酒務地3処に対する新税務地の新務地率（ $3 \div 3$ ）は、100%になる。新商税務3処⁽³⁾に対する新税務地の対新商税務率（ $3 \div 3$ ）は、100%である。

次に酒務地で元豊まで存在して地理表⁽⁴⁾にみえる存続地は、酒統計の地名に△印を付している。存続地は上記の1・2の地、及び3の地で計3処である。酒務地3処に占める存続地の存続率（ $3 \div 3$ ）は、100%になる。なお旧商税務・新商税務・地理表に見えない不明地はなく、不明率は0%である。以上の建昌軍の酒務・諸数値を酒務表に整理して示す。

O10 建昌軍 県変遷図

年 代	外 県	郭 下	軍 名
南唐時代	(南豊)	南城	建武
太平興国 4 年 979	撫州		改名 建昌
淳化 2 年 991	②		
旧務年代	1 ○	○	○
熙寧10年 1077	○ 1	○	○

O10 建昌軍 格同下州 地理表（主戸89,582 客戸25,626 計115,208 貢 絹）

格 県	距 離	郷	鎮	%	その他	備 考	水 系	計 2
望 南城	郭下	10	0	0	0		盱水	1
望 南豊	東南 120	6	0	0	銀場 4	看都・馬茨湖・ 蒙池・太平銀場	軍口水	1
計 2		16	0	0	4	土産 呉菜萸、承露仙（白漿）		2 種

O10 建昌軍

酒 務 表

外 県 1	置 務 県 1	置 務 率 100	州 県 務 2	州 県 務 率 67	鎮 市 務 1	鎮 市 務 率 33	酒 務 3	併 設 地 2	併 設 率 67	旧 商 税 務 2	対 旧 商 率 100	税 務 率 3	新 税 務 地 100	新 務 地 率 3	新 商 税 務 率 100	対 新 商 率 3	存 続 地 3	存 続 率 100
併 設 地		州 県	¹ 在城・ ² 南豊県															2 処
計 2		鎮 市																0 処
新 税 務 地		州 県	1・2 の地															2 処
計 3		鎮 市	³ 太平場															1 処
存 続 地		州 県	1・2 の地															2 処
計 3		鎮 市	3 の地															1 処
不 明 地													0 処	不 明 率		0 %		

注

- (1) 県変遷図の作成史料は前掲拙著、440頁参照。
- (2) (1)の書440頁に掲載。
- (3) (1)の書440頁に掲載。
- (4) (1)の書441頁の地理表を移録。

おわりに

江南西路の10州軍の酒額表をまとめると表1の如くである。洪州の戸は約26万で、新商税額約5万貫・酒新額約5万貫であり、商税・酒額は西路ではトップレベルである。南安軍の戸約4万・新商税約2万貫で低レベルであり、その新酒額も約5千貫と低レベルである。江南西路では大まかではあるが戸・商税の大小が酒額の大小と一致する。しかし興國軍は戸約5万、新商税額約1万貫と低レベルであるが、その酒額約3万貫は江南西路では第2位であり、戸・商税額と酒額の

表 1 O 江南西路 銭額総合表

州軍	旧額	新額	差額	増額率	官売	買撲	官売率	買撲率	戸	商税
O1 洪州	47,567	54,086	6,519	14	51,704	2,382	96	4	256,234	47,064
O2 虔州	24,560	27,133	2,573	10	26,394	739	97	3	98,130	51,229
O3 吉州	5,303	19,993	14,690	277	18,215	1,778	91	9	273,397	50,006
O4 袁州	8,864	14,247	5,383	61	11,351	2,896	80	20	129,684	14,147
O5 撫州	12,826	21,041	8,215	64	19,305	1,736	92	8	155,836	19,677
O6 筠州	18,014	13,385	-4,629	-26	12,693	692	95	5	79,591	10,134
O7 興國軍	35,119	29,624	-5,495	-16	29,624	0	100	0	53,860	10,209
O8 南安軍	6,522	5,852	-670	-10	4,106	1,746	70	30	35,799	15,120
O9 臨江軍	12,570	13,691	1,121	9	12,245	1,446	89	11	70,397	16,130
O10 建昌軍	15,181	13,917	-1,264	-8	13,542	375	97	3	115,208	14,772
計・率	186,526	212,969	26,443	14	199,179	13,790	94	6	1,268,136	248,488

大小は精確には一致しない。

次に酒額の新旧の相違をみると、10州軍のうち4州軍では旧額より新額が減額され、6州軍は増額され、路全体では14%増である。減額率は8～26%の範囲で、増額率は9～277%の範囲であるが、同率の州軍はみられない。また新旧額の差額は約670貫～約1.5万貫の範囲であるが、差額が同額の州軍はない。このように増減率・新旧差額が一定でないので、斉一的・均一的な増減政策はとられなかった。したがって新旧額の相違は酒消費量自体の変動により生じたとみななければならない。なお多くの州軍の増額率は約60%以下であるが、ただ唯一吉州のそれは極端に高率で増額率277%であり例外に属する。資料に誤りがあるか、或いは特殊な事情が生じた結果であるかを分析する必要がある。なお多くの路で酒額が商税額より大であるが、江南西路では酒額約21万貫、新商税額約25万貫で、商税額が約4万貫多い。

次に官売額・買撲額をみると、路全体の熙寧10年の官買額約20万額、買撲額約1万貫であり、その差は約19万貫で、官売が買撲の約20倍である。官売が路全体

の94%を占め、買撲は6%に過ぎない。各州軍の官売・買撲をみると同額の州軍はなく、州軍に対する同額の割り付け販売は行なわれなかった。また官売率・買撲率は虔州・建昌軍を除くと全て相違するので、官売・買撲を同率とする政策もとられていなかった。したがって官売額・買撲額・官売率・買撲率はそれぞれの州軍の都市エリア・郷村エリアの酒消費量が反映したものである。

以上にみたように都市エリア酒消費量が郷村エリア酒消費量より大きい。郷村エリアより都市エリアの酒消費量が大であることは当然予想されたのであるが、表1の数値はそのことを裏付ける。

次に表2は10州軍の酒務表を総括したものである。注目したいのは旧務年代（旧商税務表）・熙寧10年（新商税務表）・元豊（地理表）で確認できない不明地が2例にとどまり、全体の約4%に過ぎないことである。不明地率4%・存続率96%は、江南西路が社会的・経済的に安定性が高かったことを証し、同時に熙寧10年の商税の新務表に酒務地がみえる場合、その地に熙寧10年でも酒務が置かれた確率が甚だ高いことをも意味する。

表2 O 江南西路 酒務総合表

州 軍	州 県 務	鎮 市 務	全 酒 務	併 設 地	併 設 率	対 税 旧 務 商 率	新 税 務 地	新 務 地 率	対 税 新 務 商 率	存 続 地	存 続 率	不 明 地	不 明 率	旧 商 税 務	新 商 税 務
O1	5	2	7	7	100	88	7	100	70	7	100	0	0	8	10
O2	9	3	12	3	25	50	9	75	69	11	92	1	8	6	13
O3	6	2	8	3	38	50	7	88	58	7	88	1	12	6	12
O4	4	0	4	4	100	50	4	100	100	4	100	0	0	8	4
O5	1	0	1	1	100	50	1	100	25	1	100	0	0	2	4
O6	3	0	3	3	100	100	3	100	100	3	100	0	0	3	3
O7	2	1	3	2	67	100	3	100	60	3	100	0	0	2	5
O8	2	0	2	2	100	67	2	100	67	2	100	0	0	3	3
O9	3	0	3	3	100	60	3	100	100	3	100	0	0	5	3
O10	2	1	3	2	67	100	3	100	100	3	100	0	0	2	3
計	37	9	46	30	65	67	42	91	70	44	96	2	4	45	60

次に表 2 によれば全酒務46処でその内訳は州県酒務37、鎮市酒務 9 である。旧商税務45処に対して併設地30処であり、商税務のみの地は15処で、酒の販売所がない地にも商税務が置かれることが少なくなかった。併設率が路全体としては65%であるが、併設率が80%未満の州軍 3 に過ぎず、6 州軍の併設率は100%である。全体の併設率が65%にとどまっているのは、O2 虔州25%・O3 吉州38%による。また新商税務が置かれた新務地率も91%と高率である。

次に表 3 によれば酒務地46で、そのうち旧務年代の行政都市37・地方小都市 2 で全酒務地の約85%（表 5）を都市が占めるので、酒務のほとんどは都市に置かれ、酒務のみが置かれる町は西路では 7 処で15%（表 5）と少ない。小都市・町は 9 処で行政都市の24%である。小都市が 0 の州軍 9 で全州軍10の90%（表 5）、町が 0 又は 1 の州軍 8 で全州軍の80%（表 5）であり、江南西路では地方小都市・町が大半以上の州軍で発展していなかった。

次にすでに指摘したように江南西路は社会的・経済的に安定していたとみえ、表 2 によれば酒務地で元豊まで残っていた存続地は44であるから、少なくとも熙寧10年には44処の酒務地が存在した。表 4 によれば熙寧10年に新商税務が置かれた酒務地である新税務地の内訳は行政都市37、地方小都市 5、町 2、税務不置県 0（酒務のみの県）である。新務年代の都市（行政都市・地方小都市）対町＝42対 2 であり、町は全酒務地44の約 5 %（表 5）に過ぎない。また小都市が 0 又は 1 の州軍 9 で全州軍10の90%（表 5）、町が 0 又は 1 の州軍 9 で全州軍の90%（表 5）であり、

表 3 O 江南西路 旧務年代の都市・町

州 軍	O1	O2	O3	O4	O5	O6	O7	O8	O9	O10	計
行政都市	5	9	6	4	1	3	2	2	3	2	37
地方小都市	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
町	0	3	2	0	0	0	1	0	0	1	7
酒務（計）	7	12	8	4	1	3	3	2	3	3	46

注 1 行政都市数：各州軍の酒務表の州県数（酒務のみの県を含む）

O2 の 4～9 の地 O3 の 4～6 の地

地方小都市数：各州軍の酒務表の併設地欄の鎮市数

町 数：酒務－（行政都市＋地方小都市）

表4 O 江南西路 新務年代の都市・町

州 軍	O1	O2	O3	O4	O5	O6	O7	O8	O9	O10	計
行政都市	5	9	6	4	1	3	2	2	3	2	37
地方小都市	2	0	1	0	0	0	1	0	0	1	5
町	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
税務不置県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
存続地	7	11	7	4	1	3	3	2	3	3	44

存続地＝行政都市＋地方小都市＋町＋税務不置県

行政都市：各州軍酒務表新税務地欄の州県数

地方小都市：各州軍酒務表新税務地欄の鎮市数

町：各州軍酒務表新税務地欄にみえず、存続地欄にみえる酒務地

税務不置県：各州軍酒務表新税務地欄にみえず、存続地欄にみえる酒務設置の県

江南西路では新務年代でもほとんどの州軍で小都市・町が発展していなかった。

なお行政都市対地方小都市・町＝37対7であり、地方小都市・町は行政都市の約19%である。旧務年代（24%）に比して新務年代の地方小都市・町の行政都市に対する比率は減少している。ただし留意しなければならないのは、地理表に示した地名は九域志が採録した地であり、九域志は草市を採録していないので、存続地は旧酒務地より少なくなる場合があることである。換言すれば実際の存続地は表に示した数より多くなる可能性がある。したがって新務年代の19%は増える可能性がある。

新務年代の江南西路には少なくとも商税務・酒務が併置された行政都市37・地方小都市5、酒務のみが置かれた町2が存在したと思われる。

表5 O 江南西路 町・小都市の発展度

	A			B		
	区分	都 市	町	小都市 0又は1	州軍	町 0又は1
旧務年代	数	39	7	州軍	9	8
	比率	85%	15%	比率	90%	80%
新務年代	数	42	2	州軍	9	9
	比率	95%	5%	比率	90%	90%

A欄比率：町÷全酒務地×100、都市÷全酒務地×100

B欄比率：小都市が0又は1の州軍÷全州軍×100

町が0又は1の州軍÷全州軍×100

都 市：行政都市＋小都市

典 拠：表3・表4に拠り作成